

「ラブラブサセテクダサイ」

うー……うー……。

んんん……最近、アレだな……アレ。

だんだん喋ることが……なくなってきた気がする。

ここでぺちゃくちゃ語るの、それだけ吐き出したいものが多いってこと。

今は、悩み葛藤、一切合財、さようなら。どうしてかな。どうしてだろう。

たぶん、貴方に出会ったからです。先輩とお前と、貴方です。

おかげさまで、家守依知、超元氣な日々を過ごしてます。

なので今日は、いや今日も、大好きな先輩とお話しちゃいます。へへへ。

……でもね、実はね、これが最後の気がするの。

お前と私の物語。それも終章。長かったようで短かったな。

しみつたれた空気が最近苦手だから、明るくいかせてもらいたい。

いええ……いい、いっくよ……う。

もしもし。どうも先輩。家守だよ。依知だよ。こんこんにちは。

……あごめん、今日ちょっとテンション高いの。

いや、休日だからとかそういうんじゃないくて。

あのね私ね、先輩と出会って一年が経ってたことに気づいたんだ。

ほら、恋人って記念日みたいな祝うらしいじゃん。

誕生日だ、年明けだ、ってやつ、先輩って気にしないひと？

私は気にしないひとなんだけど、よくよく考えればイイモノだなって思った。

記念日から次の記念日までに色々あったりなかったり。

それを振り返るにはちょうどいい時期です。

先輩との出会い、いつまでも忘れない。夏の終わりの放課後だったね。

ノートの切れ端に、きつたない字で電話番号書いたやつ渡してきた。

好きです、お友達からお願いします。って。……ぶふッ。

先輩、不器用かよ。くふふッ。今思うとッ……あつはは、おかしー。

……ひゃー、怒った。怒らないでよ。

確かにあの時は「なんだこいつ」程度にしか思ってたけどさ、でもね。あれが私の人生の転機だったんですよ。

あれがあつたから、私、こんなひとになっちゃったんですよ。いや違う。

こんなひとになれたんですよ。感謝してます。むしろ感謝しかしてません。

先輩がいなかったら私、家守はきつと、一生あのまま。

なんてつまらん存在だったろう。呼吸してるだけの生き物だった。

でも、今は……。

ねえ先輩。

私ね、お前のこと……愛してるぞ♪

ふふふ……照れちゃってもう。

「好き」を教えてくれたのも、先輩なんですよ。

なんでこんな素敵な気持ちを知らなかったんだろう。

十数年間、私、大損してました。くやしい。

でも先輩がその分を埋めてくださったので、プラマイゼロ、むしろプラだな。

……ねー、先輩。

先輩は私と出会って、何が変わった？

変化っていうのは、まさしくこうして振り返らないとき、

分からなかったりするものですよね。

新しいものは自然と身にまわりついて、日常になって、どれが当たり前で、

どれが過去になったか、考えないと分からない。

普段過ごしてるだけだとそれは、空気みたいなもの。

目には見えないから、分からないね。

妙なものが見える私にも、それだけは見えないから。

だからこうして、たまに先輩と過去を振り返るのも、悪くない。

……先輩は私の姿が見えるけど、家守依知という存在は、

目に見えない形で先輩の中にいる。それだけで私、嬉しいよ。

っと、話が逸れたけど、先輩、何か大きな変化とありましたか。

……、……そうか、それはよかった。

私が、家守依知が、先輩や、お前の人生の軸のひとつになれてるなら、

それも私の生きる源になるよ。……うん、ありがとう。

……あ……ねえ、先輩。

一周年記念ってことで、ですね、あのですね。

いややっぱりなんでもない。忘れて。忘れなさい。忘れろ。

ぐぬ……抵抗されるとは。うう、まあ、切り出したのは私……だし、

分かった、言います。言いますよ。

私、その。……あのね、先輩と……、……イチャイチャ！……したいです。

ほら、この前は……お前の部屋でゆくりしようとしたけど、

ああいう感じになっちゃったし。

デート先も心霊スポットだったから、イチャイチャレベルがそこそだったし。

一回ぐらいいは、その、めちゃんこラブラブしたくないですか。

……マジ？ いいの？ お、おう。そうか、ハハ、なら、うん、よかった。

急に押しかけたりしても大丈夫？ ……あは、嬉しい。ありがとう。

じゃあ、あの、家に入るね。……え？ うん、今、先輩の家の前にいます。

そだよ。ずっとここで話してたよ。……声、震えてますよ。大丈夫？

あそうか、一応ピンポイントしないとダメだね。失礼だね。じゃあ押すね。

入っていいですか。実はさっきから暑くて暑くて、ぶっ倒れそうなんです。

ふふふ。お邪魔します。じゃまじゃまおじゃまのサプライズ。



こんにちは、先輩。……え、ありがとうございます。

あの不器用な先輩が、私の服を褒めるとは。雨でも降るのではないのでしょうか。

……ん？ どうしました？

ほあ、先輩のお母さまでしょうか。

初めまして、家守依知と申します。

あ……はい。先輩とは、お付き合いさせていただいております。

え。そんな。私全然、そういうの言われないですから。

あ、先輩には可愛い可愛い言われますけど。ハハ。

えと、先輩とは同じ学校で、先輩のひとつ下で、……ああいえ、お構いなく。すみません、急に訪ねてしまって。私、先輩のこと大好きなので、どうしても会いたくなってしまうたのです。

……うえ？ なに、先輩、……部屋？ あう、引っ張らないで。

分かりました行きます。行きますから落ち着いて。

すみませんお母さま、失礼します。

先輩のお部屋、お邪魔します。じゃまじゃまおじゃま、二回目。

やー……お母さまがいらっしやるとは思わなかった。焦ったー。

先輩もかなり焦ってたけど、どうしたの。

あの様子だと、ご両親に私のこと、言ってなかったっぽいね？

お母さま、かなりびっくりしてたよ。

そういう話は、ふつう家族にしないもの？ ふつうがよく分かん。

ああでも、お優しいひとなんだな、って思いました。

最初は戸惑ってたけど、若干ニヤニヤしてたし。

……母がいる、って、いいね。

いえ、なんでもないです。てか先輩、めっちゃ顔赤いですよ。

息も荒いですよ。……まさか発情してるの？ ダメですダメです。

抑えてください……、……あ、なに、お母さまと私が鉢合わせしちゃったのが、顔を真っ赤にするほど恥ずかしかったってわけ？

……アハ。ハハ。先輩、かわい。まったく、なに可愛い子ぶってんですか。

ねえ、先輩ったら、家守をそんなキュンキュンさせてどうする気ですか。

ねえー、せんぱあーい！

ん、なに？ 私さっき言いましたよね、ラブラブしたいって。

だからこうして、先輩の腕に抱き着いてるんです。

これはラブラブの一環であって、先輩をからかってるわけではないです。

あはー、悔しそう。言い返せないの悔しいね、先輩悔しいね。

ほらほら、立ち話もなんですから、座りましょうよ。ね。

へへ。先輩の部屋なのに、お前より上位に立ってるの楽しいなあ。
あ、そうさそうさ。ねえねえねえ。

先輩、ベッドインしますか。

私のこと、お前はいつも独り占めしてるけどさ、やさしいじゃん。
今日は、先輩の乱暴なところも見せてほしいな。なんて。ふふふ。

あら、先輩のお母さま。

わあ、そんな、ありがとうございます。いただきます。紅茶大好きです。

しかも、ちょうど喉が渴いていたのです。さすが先輩のお母さま。ははは。
はい、お気遣いありがとうございます。

……、……クツあはッあはははッ……。

あつぶねー、って感じですか？ あーあー先輩、冷汗かいてますよ。

いえいえ？ 狙ってませんが？ たまたまー、お母さまが来ちゃっただけ。

いやあ、ははは、先輩、今日はいつも以上に面白いなあ。

お母さまも、お優しいですね。先輩にそっくりです。

魂の形というのかな、やっぱり親子って、そういうの似るんですね。

あれ？ 先輩……あれ、怒ってるの？

せーんーばーいー、機嫌をおろ、直してくださいよう。

別に私、先輩を怒らせたわけじゃないんですよ。

お前は表情豊かで、いろいろな感情を見せてくれるから、

ついついからかいたくなっちゃうわけ。嫌ってるわけじゃないんですよ？

だって、こんなに。

好き……♪ だもん。えへへへ。

せんぱあい。さっきも言ったけど、家守、今日はイチヤイチャしたいのです。

ラブラブさせてください。らぶらぶ、らぶらぶ。あいらぶゆう。

ほら、頭撫でていいですよ。あ、別に撫でろって言うわけじゃないですよ。

許可です、許可。だからほら、早く撫でて。

……ん……♪ いひひ、えへへ……♪

うむ、なかなか上出来。今後に期待。

んあ？ なんですか先輩。私のほつぺたが気になりますか。

んん。んむ。ちょ、ツンツンしないで。……んむうう。

それなら私だって。えい。えいえい。ぶにぶに。ぶにぶに。

フフッ……何してんだろ。たわむれ。さわりあい。楽しいね。

ぎゅ。先輩の手、つかまえました。フフ。頬ずりしちゃうもんね。

んう……♪ なんて先輩の手って、こんなに温かいんだろう。

ただの手なのに、なにか、やさしいものが伝ってくるんだ。

ひよっとすると先輩も、私みたいに……不思議な力を持つてるのかもね。

だとしたら私、先輩の術中にまんまとハマってます。ぎゅ。

えへへ。いいんですよ。もうっと、先輩の魔法でハマってくださいな。

あ、先輩、まだ明るいからさ、やさしいことはダメですけど。

お腹とか、触ってみますか。……へ。うん、私のだよ？

いや、自分のお腹さすってどうすんねん。ハライタじゃん。

何をビビっていらっしゃる。

触る理由が欲しいですか？ ……なんかね、紅茶飲んだらお腹すいちゃって。

でも最近、お腹周りが気になるから、先輩に確かめてみてほしいの。

これでいいですか。

ほら、どうぞ。さわさわしてください。あ、服の上からね。

……あっ……♪

オオオ、やば、変な声出ちゃった。やば。ハズカシ。やっぱり無しで。

いや、うん、そういうの感じやすいので。アア、やらなきゃよかった。

……何ですか。今日はやけに積極的だな、とか思ってますか。

もう。そういう日もあるでしょ。今日はそういう日なの。

一周年記念を盾にしているわけじゃないですよ？ たまたま重なったんです。

だからほら、今日はオシヤレしてきました。

そうそう、先輩が珍しくファッションを褒めてくださって、嬉しかったです。

デートの時いつも先輩、ちらちら見る癖に何も言ってこないし。

あ、でもね、あのね、この服なんだけどね。

自分なりに考えてみたんだけど。ちょっと可愛すぎかなって思ってた。

私ほら、そういうなんか、可愛いみたいなのは似合わないですから。
家ではジャージしか着ませんし。

こんなヒラヒラスカートは、制服以外ではちょっと違和感が……、え？

……もう、いつも可愛いって言ってくる先輩は、麻痺してるんですよ。

世間一般で見たら、私なんか可愛くないもん。全然可愛くないもん。

……可愛くないってば。先輩、生意気ばかり言ってるよ、

先輩のこと褒めちぎって頭爆発させますよ。

う……まだ言うか、この……。ハイハイ分かりました、私は可愛いです。

家守依知、超可愛いです。これでいいですか。……いいんだ。そりゃそうか。

ほんとさ、お前は私のことになるよ、急に頑固になるよね。

私のこと、どんだけ好きなんですか。言葉では言い表せないくらいですか。

……そうか♪ フフ♪ ……なんでもないですよ？

ニヤニヤしてるのはきつと、先輩が必死なのがおかしいからですよ？

別に、可愛いとか好きとか言われて、嬉しくて幸せな感情を抑えられなくて、

ニヤニヤが止まらないわけじゃないんです。ちゃいますから。

ぬ……ニヤニヤしおって。私の真似ですか。ものまね大会ですか。

じゃあ私も先輩のものまね。ごほんごほん。

……依知、好きだ……。

ぶふっ……あつははは。せーんばーい。好きだ、ってやってください。

好きだ、って——きゃっ!?

あ……。う、お、押し倒すなんて、はは、そんな怒りました……？

……怒ってないの？ じゃあ、なに……襲っちゃうの？ 白昼堂々と？

お母さまに聞かれちゃうよ。いいの？ いいのかな？

……、どうしたんですか。何もしないの？ 先輩らしいと言えばらしいね。

じゃあこの、ドラマの一時停止みたいな時間を、二人でずっと味わいますか。

見つめ合って。視線そらさないで。私のことジツと見て。そうそう。いくよ。

先輩……♪ 私、先輩のこと……ずっとずっと好きでした……♪

……ん、嬉しい♪ 私もね、先輩のこと、愛してます、大好きです……♪

っていうか、その体制キツくない？

……あ、すみません。ムードが台無しに。
力抜いていいよ。覆いかぶさっていいよ。先輩の身体、全身で受け止める。
来て。

ん……。おもっ。あ、いやいや、大丈夫です全然。反射で言っちゃいました。

あー、なんか、なんかね、こうされてると私、とっても……ぼーとしちゃう。

先輩に支配されちゃってるみたいで。まったく嫌な気はしません。

むしろ最高です。このまま先輩の身体と、お前の愛に押しつぶされたい。

……なあ。私って、変態なのかな。……なんとなくそう思ってます。

でも、まあ、変態でもいいや。先輩が好きでいてくれるなら。

待って。どかないで。キツくなったらギブギブ言うから。

ギブが来るまでは、私のこと、圧迫してください。えへへ。

3コール

……おい。おい。起きて。先輩。起きろ。

やあ。まったく、まさか寝ちまうとは思いませんでした。

先輩、めちゃくちゃ寝ぼけてたよ。覚えてる？

急にさ、隣にダランって寝転んだかと思ったら、私のこと抱きしめちゃって。

何したと思います？ ……フフフ、言いません。言ってやるものか。

ちなみに私も、グースカグースカしてる先輩に、色々しました。

言いません。言ってやるものか。

あのひとときは、全て私が墓まで持っていきます。残念でした。

フフフ。今度私が寝ちゃったときは、先輩の好きにしたいから。ね？

あ、すっかり長居しちゃってすみません。すぐく楽しかった。満たされた。

先輩も楽しかった？ 満たされた？ ……うん♪ よかったよ。

そろそろ帰らないと。

ぬっ……!?!? んん？

あ、ご、ごめん先輩。……やっぱり、お父さんからだ。なんだろう、

……先輩。うん、ちょっと待ってて。

もしもし。どうしたの、お父さん。……私？　今、先輩のおうち。いや、大丈夫だよ。うん。何かあったの。

……うん……うん……、……えッ……？　え、待って、それって、……、分かった。……返事は、その、……少しだけ、

待ってほしいんだけど、いいかな。……うん、ありがとう。

……ふううー……。……ちよつと、ね。

先輩。……前に話したの覚えてるかな。私、母がいないって。

私が生まれてすぐ、逃げてしまった。……ひとじゃない、妖です。

うん。それで、……母から父に……手紙が届いたらしい。

……名前……？　ええと……確か、……ヒゴロモ、だったかな。

草とか花とかの妖だ、って、そういう話を昔……聞いたことがある気がする。

母から手紙。内容は、……父と娘に、もう一度会いたい、って。

ハハハ……随分と身勝手な話ですよ。今まで子育てを父に押しつけて、

自分は尻尾撒いて逃げた癖にさ。

父も……悩んでたみたい。そりゃそうだよ。

でも、もし会う気があるなら……会いに行こう、って言われた。

……はあ……。私、どうすりゃいいかな。いや、先輩にそんな話、

するべきじゃないのは分かってるんだけど。

……ありがとう、先輩。

私、母が嫌いで嫌いで仕方なかったよ。父は暴力をふるってきたりもしたけど、

でも、それでも、私を育ててくれたし、最近は穏やかになってきたし、

一番憎むべきは、母だと思ってた。

でもね。先輩のお母さまと会って、話して、ああ、母親って、

……やさしいんだな、温かいんだな、って、思ったりして。

羨ましい、って……思った。

自分の境遇を、初めて「不幸かもしれない」って思った。

幸も不幸もなかった、平坦な道を歩いてきたつもりだったけど。

先輩と出会って、ひとというものを知って、その区別がつくようになって。

全てが幸せだ、って、ここから思ってた。

……これが現実なんだね。それと向き合わなきゃいけない日きたんだね。……うん。これから、父と話し合うよ。

もし、会うことになれば……私も……。

……先輩……？

え、そんな、ダメです、ダメ、先輩、私の母は、ヒゴロモは、妖なんだぞ。

ひとと妖が関わって、プラスになることは何もない。分かってる？

以前、先輩を妖で取り囲んでしまった時があったでしょ。

もう二度とあんなことしたくないって、本気で思ってるんです。

先輩にもしものことがあったら、私……。

……う、……確かにね、心強いよ？

お前は私にとって、愛する者で、人生の支えで、先輩だから。

お前にはお前の人生がある。私を助けて、損をするかもしれないよ。

それでも……本当に……ついて来てくれるの？　……分かった。

あの、先輩。……、……ありがとうございます。本当、ありがとう。

頼り切りすぎて、こんなのダメかもって思うけど、お前が一緒なら、

私、すぐに答えが出せます。……母に、会います。

でも、ね、ついて来てくれるのは嬉しいんだけど、途中まで、でもいいかな。

一緒に行ってくれるだけで、私、頑張れるから。その先は、ひとりで行かせて。

……うん。……ああ、私、先輩がいてくれてよかった。先輩の恋人でよかった。

返事、今するね。うん。

……もしもし、お父さん。あのね……――

バケノカワノシタデマツ・前

……先輩、今さらですが……すみません、付き合ってもらっちゃって。

本当はね、ひとりで行かなくちゃいけない……と思うんだけど。

やっぱり本心は、先輩について来てほしかったの。

父も、「彼がいるなら心強いな」って、言ってくれたし。

……先輩がね、迷わずにさ、「一緒に行くよ」ってお返事くれたとき、

「あ、好き」ってなりました。好き。へへ。

あれ、照れてるんですか。

それとも、バスの中でイチヤイチヤとか、恥ずかしいですか。

大丈夫です。ほらもう、ほとんど誰も乗ってません。

外、見たこともない景色ですね。電車乗ってバス乗って、自然だらけで、

このまえの、宮ヶ瀬湖を思い出しちゃいますね。こういう風景、

なにかと縁があるんだな。ははは。

……ふえ。あ。……手、震えてました？

びっくりした。急に握られたから、襲われちゃうのかと思った。なんてね。

……ふう。なんだろ、先輩に握られてるのに、震えが止まってないや。

あは、あはは。緊張してるのかな。やだなあ、もう。先が思いやられるね。

……先輩……。

私、母に……、母だった女に、何を語ったらいいだろうか。

生まれてから今日までの恨み辛みを、投げつければいいのか。

それとも、会いたかった、とか、耳障りの良いことを言えればいいのかな。

全然、分からない。分からないことだらけだ。

私、いったいどうしたら……。

……、伝えたいこと……か。なんだろう。私、何を伝えたいんだろう。

……まずは、先輩のこと。あと、先輩のこと。それと、先輩のこと。

うわあ、先輩しかないじゃん。何こいつ惚気やがって、とか思われないかな。

……、……そういうものかな？ 母親はそういうの聴くの、嫌じゃないのかな。

あ、でも、そうだな、先輩のお母さまは、私を見て嬉しそうにした。

じゃあ、うん、先輩を軸に考えてみます。ありがとうございます。

……ん。

ごめんね、少しだけ、寄り添わせてください。

先輩の体温、やさしさをもつと……感じていたいから。

えへへ……。

田んぼ、山、周りに建物もない、……うん。このあたりかな。

たぶん、この先。森の中に住んでるんだってさ。妖精みたいだな。

……先輩。言った通り、ここからは私ひとりで行きます。

妖が蔓延る森の中なんて、先輩にとって悪い影響しかないから。

大丈夫。こう見えて私、強いです。いざとなれば、ウカミもいますし。

……それに、今この時だけは、先輩に頼ってはいけない。

私が解決しなければいけない、そんな気持ちなんです。

でもね、先輩には見守ってもらいたい。わがままでごめんなさい。

……うん。いつもいつも……お前には……救われてばかりだな。

……すう……はあ……。

ぎゅっ。先輩、生きて帰ってこれたら、私を抱きしめてほしい。

……ん♪ きつと戻ってきます。きつと。

もうそろそろ、夕暮れが近いね。逢魔が時だ。

フフ。不吉の前触れ、魔物に遭う時間帯って言われていますが、

私がこれから会うのは、まさしく、魔物と呼ばれる類い。

でも私は、そいつに……私の今を、歌うんだ。

先輩のこと、父のこと、どんな言葉になるのかは私にも分からないけど。

でも、言います。言いたいから。四肢をものがれても、最後まで。

先輩。

いってきます。

少しだけ、待っててください。……必ず、笑って戻ります。

📖 バケノカワノシタデマツ・後

ふう……。早く戻らなきゃ……先輩を待たせてしまっている。

ふふ。先輩のことだ。きつと寂しくて人肌恋しくて、

両手を合わせてお祈りしてるに違いない。

……ああ。過ぎてしまえば、何を悩んでたんだろう、って感じだな。

まさか、泣きつかれるとは思ってなかったけど。

でも……名前で呼んでくれた。先輩のように。父のように。

……いい、景色だな。

あれ？　なんだ。なんかこれ……見覚えが。

……はッ……！？

これは……この……景色……は……。

……たまに、夢を見る。

遠くに……山、近くに田園、ひぐらしが鳴いてる。

世界が赤く染まってる。

私はひとり。ただひとり。

何かを待ってるわけではない。って、いつかはそう思ってた。

でも私は……彼を、待ってる。

しばらくすると、彼が来る。笑って、小走りで、私のもとへ。

私も笑ってる。理由はきつと、「好き」だから。

ううん、それだけじゃない。それだけじゃないんだ。

きつと、……私は、家族を手に入れられたから。

だから、こんなに……笑ってしまうのだろう。

……誰かが私を見つめてる。その視線は、きつと、きつと……。

ああ、そうだったのか……。

お母さん……。

……！　誰だ。誰かが近づいてきてる。

ああ、……先輩。先輩だ。

やっぱり……来てくれたんだ。

そうか。あの夢の中で、誰かを待っていたのは……私じゃなくて……。

……やあ、先輩。大変お待たせしました。

フツッ。どうしたんですか。そんなに慌てて……。

ん、私はね、……いえーい、って感じです。

両親と……一緒に暮らすことになりました。えへへ。

ふわッ！？　ちょ、ちょっと先輩、なにしてんですか、

こんなところで抱きしめるなんて、

……あ、ああ、そっか、私、お願いしましたもんね。

でもあの、今、お母さんがこっちを見て……、……いや、何でもない。

ふふ。私のこと、心配でした？　大丈夫ですって。先輩は心配性なんだから。

……ねえ、離さないで。そのまま聞いて。

私、お前と共に見つけたい場所がある、って、話したことあるじゃないですか。

……見つけました。たった今。この瞬間。この場所、この時間。

ずーっと、どこにあるのか分からなかった。

何度も何度も夢に見て。先輩と出会ってから、その夢の中に、

お前も出てきた。でもその場所は、どこなのか分からなかった。

……ここです。ここはきつと、終わりで、始まりで、先輩と私と、

全ての……。

ああ……こうなることは、必然だったのかな。

必然って、自分の選んだ道を歩いていった結果のことを言うのかな。

それとも、最初から決まっていた約束事……なのかな。

難しいことは、私には分からない。私には、色んなものが見えてしまうから。

それが真実なのか嘘なのかも、見ている私にだって分からないんだ。

でもね、ひとつだけね、分かるの。

今ここに……お前がいてくれることが、私、……嬉しいよ。

私は一人じゃなかった。一人じゃない。

どうやら、愛する恋人も、愛する家族もいる……恵まれた存在だったみたい。

いつの間にか私、とっても幸せになってたね。

……、ありがとう。……大好き……。



先輩。今度はさ、私のウチへ遊びにきてほしいな。

父と、母と、その他大勢と私でお迎えいたします。

……いやいや、怖がらなくて大丈夫ですよ。

家守家は、先輩というひとを歓迎しています。

私が今ここにいられるのは……今の全てが、お前のおかげなのだから。

あ……そうだ。

結婚しませんか？

……おわ、びっくりした。

まったく、いつもいつもオーバリアクションだなお前は。

いや、冗談じゃないですよ？ しませんか？ 結婚。えんげーじ。

先輩だったら、父も母も二つ返事してくれると思う。

いやですか？ ……ほんと？ えへ、よかった。

ふふふ。嬉しい。嬉しいよ。めちやくちや嬉しい。すつごく嬉しい。

ああでも、先輩のご両親と親睦を深めなきゃね。

お母さまはお優しいひとだったけど、お父さまはどうなのかしら。

……へえ、似てるんだ？ 先輩に？ じゃあきつと大丈夫。

あでも、先輩に似てるなら、私、お父さまのほう好きになっちゃうかもね。

……ククツ、それこそ冗談ですって。

誰に似ていようが、私が好きなのは先輩ただひとり。ひとり。ひとりです。

そうそう、前々から言おうと思ってたことがあって。

なんか、不思議じゃありませんか。先輩はそこにおいて、私はここにいますが、

お互いがお互いを、「好き」、なんですよ。

好きとか、会いたいとか、愛してるとか、全部が目に見えない気持ちなのになさ。

ひとも、……妖もね、化けの皮の下に気持ちを隠してるみたい。

「好き」になった者同士は、

口っていう穴から、気持ちを言葉に変換して吐き出して。

その言葉に……二人とも、胸が震えて熱くなる。

何が言いたいか。何が言いたんだろうね、私。

先輩に好きって言うことも、言われることも、

やっぱり、目には見えない感情なんだけど。

身体も、頭も、全部全部、……幸せ。

そんな気持ちになれるひとが、今、目の前にいることが……不思議だな、って。

ふふふ♪

あつ、ところで、もし嫁入りしちゃったらさ、

私は家守依知じゃなくなっちゃうね。

家守依知の終わり、第二の依知の始まり。

わー、なんかそれ、いいな。素敵だな。胸がキュンキュンしちゃうな。

その終わりと始まりを先輩に見届けてもらえるのも、嬉しいものだね。

あははは。

……そろそろ、夜だな。

この夜の向こう側には、一体何があるんだろう。

ただの帰り道のはずなのに。

暗い。何も見えない。怖いね。夜は怖い。何が潜んでいるのかも分からない。

……あは。先輩、こういう時はかっこいいんだから。

そうだね。お前の手のぬくもり……、ひとりじゃないって思える。

夜の向こうを恐れるんじゃないくて、楽しみにしていこうか。

どんなことが起きても、先輩と一緒にだったら、私、ほら。

えへっ♪ 笑っていられるよ。

行こう。帰ろう。

ここから先は、全部……未来。

あなたと、依知の、未来です。

(終)